

# 新しい道を切り拓いて，夢を実現しよう！

Pioneer a New Way and Make Your Dream Come True !

野呂知加子 Chikako YOSHIDA-NORO

私は、中高一貫女子高（フェリス女学院）で出会った若い女性の生物の先生の影響で、いのちというものに興味をもち、生物の勉強がしたくて、千葉大学理学部生物学科に進学しました。次のきっかけは京都大学大学院理学研究科進学で、ここですばらしい研究（細胞接着分子カドヘリン）と師に出会い、研究者・学者として生きたいと思いました。

自分の性格は、人に言われるとおりの毎日ルーティンワークをすることよりは、自分の意志で自分の行動を決め、他人と違う新しいことをしたいほう（ナンバーワンじゃなくてオンリーワンが好き）なので、研究者に向いているかもしれないと思いました。私のモットーは、Never Give Up ! ですが、同時に、何ごとがんばりすぎない自然体でやりたいと考えています。

夫は大学の同級生で、一緒に大学院受験して京都に行きました。そこで学生結婚して、博士課程の途中で長女が生まれ、最初のポストドク時代に長男が生まれました。子育てについては、夫が子供好きでかなり協力的でした。家事は分担制ですが、比重は私のほうが大きいですね。私は中学のときからオーケストラでバイオリンを弾いており、声楽や合唱もやっていました。この趣味は仕事や子育ての合間を縫って続いています。夫や子供も音楽が趣味で、ピアノやチェロ、フルートなど演奏し、音楽のある生活を送っています。

大学院卒業後から、当時では珍しかった任期制研究職を歴任してきました。特に現在の科学技術振興機構にあたる機関のERATOプロジェクト（研究員からグループリーダーへ）や、さきがけ研究21（研究員）では自分の意志で新たに企画し、時間の使い方を含め比較的自律的に研究できる環境に恵まれ、それぞれの職が楽しかったです。ただ、任期終わりに近づくと、次の職探しが結構大変で、また、次の職では材料やテーマが微妙に違うので、なかなか仕事が完成しない悩みはありました。しかし、経験は無駄にはならないので、そこで蒔いた研究の種（細胞接着分子、糖鎖、再生幹細胞、生殖細胞など）が今育ちつつあり、そこで培ったマネジメント力と人脈は現在もいろいろ役立っています。

研究者である夫とともに、一度は海外で研究をしてみたいと思っていました。ちょうどうまく、夫が英国ケンブリッジにある英国医学研究所（MRC）に、私はケンブリッジ大学 Wellcome/CRC 発生・がん研究所に、2年間ダブル留学することができました。子供2人は地元の小学校に入りました。私の英国でのボス夫妻（教授と講師）は、4人の子育てをしながら、カエルの発生や生殖細胞の研究をしていました。研究所では、技術補佐員や中央集中施設が、さまざまなサービスを提供してくれるので、研究者は雑用がなく、自由な発想でアイデアを生み、さかんにディスカッションや共同研究をして、アイデアを実現することができました。ケンブリッジは職住接近が可能で、研究と生活を両立しやすかったです。ただ、教授のポストは非常に少なく、ボス夫妻はその後、奥さんの教授ポストを求めて、米国に移住しました。

大学院のときから、私の周りに女性はあまりおらず、その後も少なかったです。少ないなりに、大変なことと、たぶん得したことがありましたが、とくに男女の意識というのはありませんでした。ケンブリッジ時代はボスも女性でしたし、女性ポストドクや院生も多くいて、女性研究者の少ない日本と比べて「息がしやすい」とは感じていました。2000年から理化学研究所の定年制研究職になりましたが、相談員をお引き受けし、皆さんの悩みを聞くうちに、男女共同参画というもの必要性を感じました。2005年より日本大学に勤務するようになってから、男女共同参画学協会連絡会に参加し、ダイバーシティ推進・女性研究者を取り巻く環境について、いろいろ勉強させていただきました。これからの科学技術発展のためには、ダイバーシティ推進・女性の人材活用が必須でありますので、微力ながら、女性研究者の活躍促進と次世代育成のためのお手伝いをしたいと思っています。

大学院のときから、私の周りに女性はあまりおらず、その後も少なかったです。少ないなりに、大変なことと、たぶん得したことがありましたが、とくに男女の意識というのはありませんでした。ケンブリッジ時代はボスも女性でしたし、女性ポストドクや院生も多くいて、女性研究者の少ない日本と比べて「息がしやすい」とは感じていました。2000年から理化学研究所の定年制研究職になりましたが、相談員をお引き受けし、皆さんの悩みを聞くうちに、男女共同参画というもの必要性を感じました。2005年より日本大学に勤務するようになってから、男女共同参画学協会連絡会に参加し、ダイバーシティ推進・女性研究者を取り巻く環境について、いろいろ勉強させていただきました。これからの科学技術発展のためには、ダイバーシティ推進・女性の人材活用が必須でありますので、微力ながら、女性研究者の活躍促進と次世代育成のためのお手伝いをしたいと思っています。



野呂知加子 Chikako YOSHIDA-NORO

日本大学生産工学部 / 大学院総合科学研究科  
准教授，理学博士。

2006-2010 日本発発生生物学会男女共同参画 WG 代表。

2009-現在日本女性科学者の会理事。

専門は発生生物学，分子細胞生物学。

E-mail: noro.chikako@nihon-u.ac.jp